第１章　帯広市の概要

梅原　沙弥香
福本　豊

1.1　位置

北は大雪山系、西は日高山脈に囲まれた広大な十勝平野の中央部に帯広市は位置している。面積は 618.94ｋｍ2 で、市街地は北に集中し、南は大規模畑作地帯が続いており、澄んだ青空、どこまでも続く雄大な大地に恵まれたまちである。

1.2　気候

帯広市の気候環境は、亜寒帯湿潤気候に属し、大陸性気候である。春と秋は短く、夏は割合に高温、冬は低温乾燥でとりわけ降雪量が少なく晴天の日が多い。また、降水量が少なく、年間の晴天日数の多さは全国でも有数の地域である。

気温は夏が 30 度以上、冬が－20 度以下と寒暖の差が激しく、四季の変化を五感で感じられる地域となっている（図 1-1）。

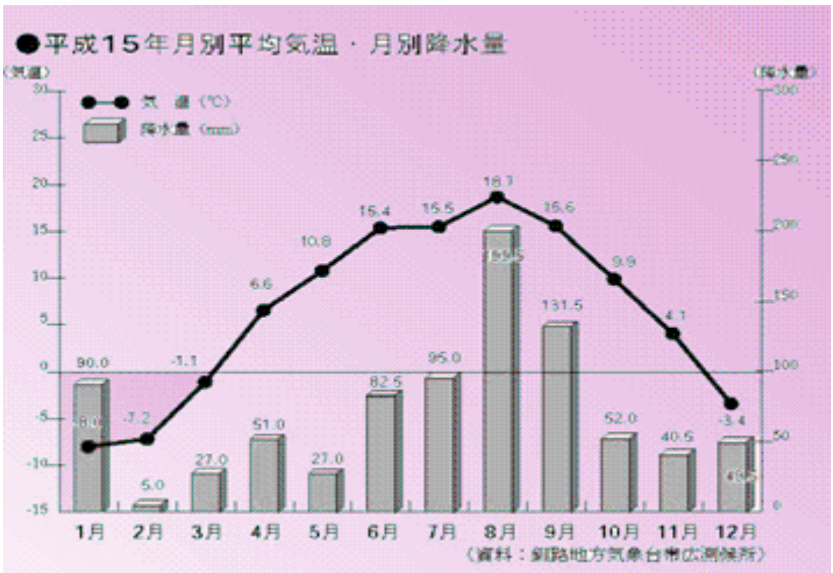
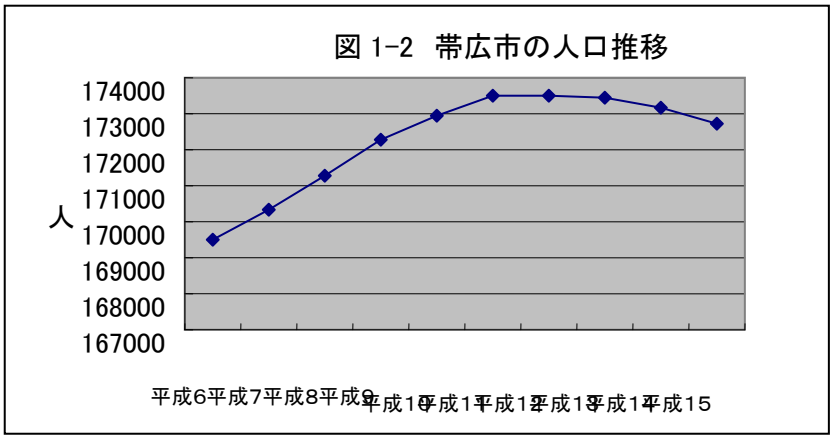


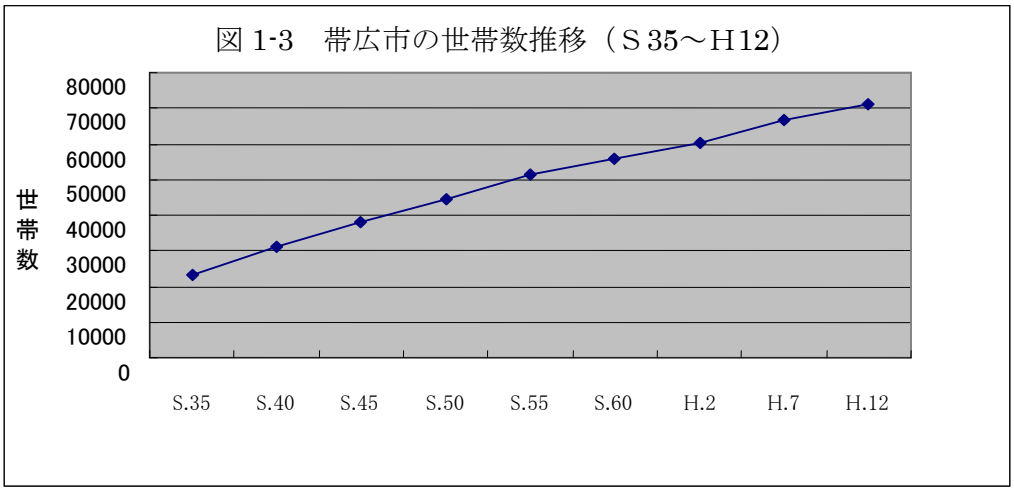
図 1-1　帯広市の月別平均気温・月別降水量

1.3　人口

帯広市の人口は、平成 15 年 3 月末現在 172703 人で、その内訳は、男 83447 人、女 89256 人となっている。人口の推移をみてみると、平成 12 年までは増加傾向にあり、173512 人まで増えたが、それからは減少傾向にあることがわかる（図 1-2）。世帯数は平成 15 年 3 月

現在 76546 世帯である（図 1-3）。





また年少人口は減少、生産年齢人口は緩やかな増加、老年人口は増加しており少子高齢化も進んでいる。とくに高齢化率は急激に増加している（図 1-4）。

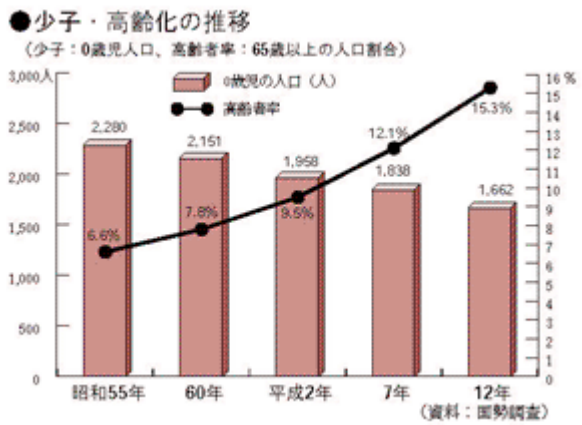


図 1-4　帯広市における少子高齢化

表 1-1　帯広市の産業別就業人口

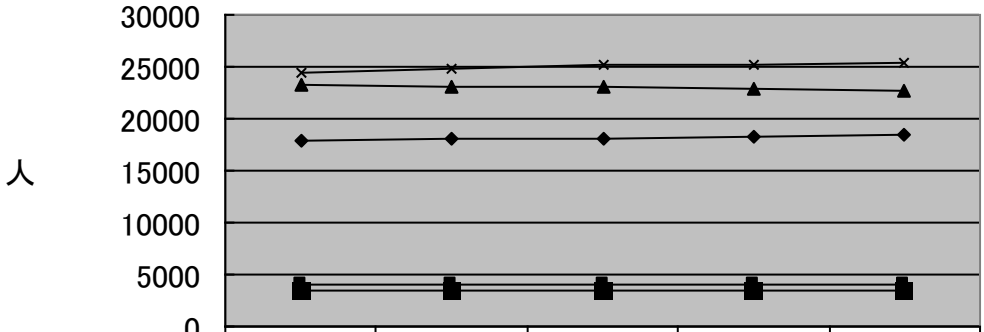
●産業別就業人口（15歳以上）（平成12年）

総数	第1次産業			第2次産業				第3次産業							分類不能の産業
		農業	林・漁業		建設業	製造業	鉱業		サービス業	卸・小売業	公務	運輸通信業	金融保険業	その他	
86,976	3,948	3,628	320	19,364	12,073	7,173	118	62,020	24,411	22,897	5,826	5,517	2,359	1,010	1,644
(100.0)	(4.5)	(4.1)	(0.4)	(22.3)	(13.9)	(8.3)	(0.1)	(71.3)	(28.1)	(26.3)	(6.7)	(6.3)	(2.7)	(1.2)	(1.9)

（資料：国勢調査）

帯広市の人口は平成 12 年（2000 年）をピークにして少しずつ減少をはじめた。帯広市の人口減少とは逆に、帯広市の周辺の町村は増加しているところもみられる。このことから、帯広市から周辺の町村に人口が移動したことが考えられる。

図1-5　周辺町村の人口



	1999年	2000年	2001年	2002年	2003年
芽室町	17857	18047	18152	18265	18446
中札内町	4011	4044	4085	4049	4073
静内町	23234	23031	23036	22827	22647
幕別町	24339	24785	25170	25270	25423
更別町	3451	3420	3426	3436	3429

芽室町　中札内町　静内町　幕別町　更別町

1.4　産業

帯広の中心産業は農業であるが、第三次産業のサービス業や卸小売業も盛んである。農業は平坦な地形を利用して、小麦・てん菜・馬鈴しょ・豆類の 4 作物を中心とした大規模畑作地帯である。また人口 17 万人都市でありながら農業従事者が 3628 人と高い数字を示している。ちなみに道内の 10 万人を超す都市と比較すると、札幌が 3431 人、旭川が 4985 人、釧路が 416 人、小樽が 479 人、北見が 2115 人であり、帯広の農業従事者数の高さが表れている。

工業は昔から食料品の加工などが中心であり、現在は製造品出荷額などで見ると食料品、木材・木製品、窯業・土製品の順となっている。全体としては 1000 億円をこえる程度の規

模であるが、道内主要都市と比較すると、低い集積となっている。

商業は平成 14 年度で商店の数が 2600 件で、商業従業者数は 21343 人である。このうちの約 29%が一般卸売業、約 24%が飲食料品小売業である。また中心市街地は空洞化が進んでおり、郊外に大型店舗の進出が進んでいる。

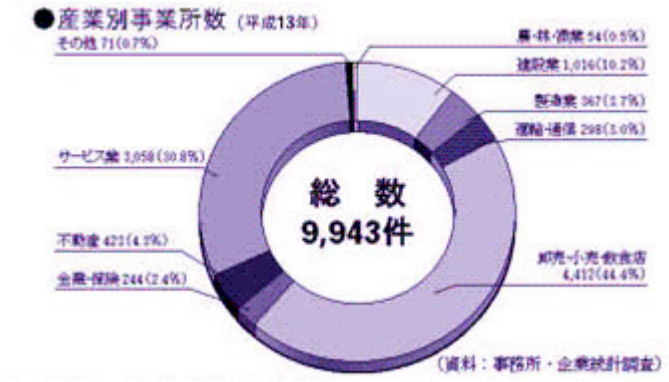


図 1-6　帯広市の産業別事業所数

1.5　商業

＜起源＞

帯広の商業の始まりは、明治 25 年から 26 年にかけてこの地に集治監分監（監獄）が建設されるようになった頃である。当初はこの監獄で働く役人たちが主な取引相手だった。ここから帯広の商人活動ははじまった。

＜帯広生まれの企業＞

旭川でも数多くの支店を持ち、教育大旭川校の近くにもあり、教育大生も頻繁に訪れている『ダイイチ』。この会社の発祥は帯広であり、本店は今でも帯広市にある。1958 年創立、1963 年に旭川に進出、この時より『株式会社帯広フードセンター』から『株式会社第一スーパー』から現在の『株式会社ダイイチ』に社名を変更、2004 年札幌『八軒店』を出店し進出。札幌・旭川・帯広地区に支店を合計 22 店持ち、売り上げは 236 億 1000 円（2004 年度 9 月期）。

また、今は本社を札幌に移したが、よつば乳業も帯広地区の 8 農協が中心となり出来た会社である。

＜施策＞

今現在、十勝・帯広の商業の中心的な役割を担ってきている帯広市中心市街地は、車社会の進展や消費行動の変化などの影響による、大型店の郊外展開や後継者不足、空き店舗

化などにより、空洞化が進行している。よって地域の商業環境はますます厳しい状況になっている。こうした課題から以下のような施策が打ち出された。

(1)個性ある商店街の形成

・個性的で魅力ある商店街の形成をはかるため、都市基盤整備とあわせて、商店街が行う活性化事業を支援する。

・経済団体などと連携しながら、空地・空き店舗などの有効活用を促進する。

(2)商店街の環境整備

・中心市街地においては商店街の個性を生かしたコミュニティ空間づくりや、電線類の地中化、ロードヒーティングをすすめるなど、快適な商業環境を整備する。

(3)経営基盤の強化

・事業者自らが行なう研究会や講習会などを支援し、商業の担い手となる経営者や若手商業者の育成をはかる。

・中小企業の経営安定や新規開業などを支援するため、融資制度の拡充をはかる。

・企業の集団化・協業化を支援するため、近代化・高度化資金などの導入を促進する。

(4)地域の商業環境づくり

・大型店と地元商店が共存できるような地域独自のしくみづくりを検討する。

1.6　交通

広大な面積と、厳しい冬がある帯広市の交通手段としては、自動車が多く使われ、依存度も高い。日常の買い物から通勤、レジャーなどあらゆる面で自家用車が使われている。また平成 13 年現在、1 世帯あたりの平均自動車保有台数が 1.8 台ととても高い保有率になっている。これに伴い、交通事故の発生件数及び死傷者数が増えていることが、問題である。

参考文献・参照 HP

東洋経済新報社編，1999-2004,『地域経済総覧 1999-2004』東洋経済新報社.
帯広市，2004,『帯広市勢要覧　平成 16 年度版』.
帯広市ホームページ：http://www.city.obihiro.hokkaido.jp/